

天理教加奈陀教会設立

1933年7月の中山正善2代真柱のバンクーバーへの巡教は現地の教信者を勇気づけ、また日系移民社会へ天理教の存在を知らしめる大きな一つの契機となった。同時に、当時現地で発生していた布教師間での信者の取り合いといった問題、教会本部未公認の加奈陀天理教会やスティブストン集談所などの状況を鑑みて、教会本部は教会系統をこえてBC州に在住する教信者を一つにまとめるための教会を設立することにした。こうして1934年12月に教会本部直轄の天理教加奈陀教会が設立された。

初代会長として教会本部より派遣された鈴木亨は1935年3月に赴任し、バンクーバーのプリンセス街に拠点を構えて活動を開始した。鈴木は山名大教会に所属していたが、大学卒業後から教会本部で青年としてつとめていた。4人の子供のうち小学生2人を日本へ残して、妻と幼子2人とともに着任すると、在住の教信者をとりまとめながら、戦後に同教会の3代会長となる大倉トミを導くなど積極的な布教活動を行った。また日本領事や日系移民社会の指導者層とも交流し、BC州での天理教伝道に尽力していった。加奈陀教会はロサンゼルスにある天理教アメリカ伝道庁の管轄下となり、鈴木は同伝道庁の理事にも任命された。1936年に執行された教祖50年祭には教会本部への帰参団体を組織し、鈴木は家族や信者とともに日本に一時帰国した。その際、天津（華北）伝道庁長に命じられ、カナダへ戻ることなく新しい任地へと向かうことになった。

鈴木亨のあとを受けて2代会長となったのは、水口大教会の役員をつとめていた田代沢治であった。1938年末に赴任すると、バンクーバーだけでなく、グリーンウッド、ケローナなど、BC州一帯のいたるところに出向いて講演活動などを行った。また日系人子弟への教育へも尽力した。田代は、日米開戦と同時に他の日系人と同様に強制立ち退きとなり、タシメの収容所に入った。収容中も他の布教師と協力しながら、同じく収容された日系人へ布教活動を続けていた。しかし終戦後、滞在が困難となったため1946年に日本へ帰国した。

戦後に3代会長となったのは大倉トミであった。トミは1892年に山口県玖珂郡高森町で生まれた。22歳の時に結婚し、数年してから夫房吉の呼び寄せで1918年にカナダへ渡った。しかしトミが37歳の時、房吉がBC州ウッドファイバーの製材工場で就業中に事故で亡くなった。その後5人の子供をつれてバンクーバーへ移った。こうして苦難の生活を送っていた最中、1935年に天理教に出会い入信した。トミは鈴木会長夫妻の指導のもと信仰を深め、1936年に一時帰国して教会本部の別科で学んだ。バンクーバーへ戻ると加奈陀教会に住み込み、のちに2代会長として赴任した田代にもつかえ、布教活動に専心した。戦時中は、田代とともにタシメ収容所に入った。戦後に田代が帰国することが決まった際に、カナダに残って加奈陀教会の目標を守りたいとの希望を申し出て、カナダ政府の移民政策もあり東部のトロントへ移住した。1952年に加奈陀教会の3代会長として任命された。

天理教加奈陀教会と日系移民社会

本部直轄の天理教加奈陀教会が設立され、初代会長として鈴木亨が派遣された結果、それまでBC州の天理教の代表的存在であった加奈陀天理教会は、新設された天理教加奈陀教会へと吸

取され、信徒集団による「合議制」から、教会長を中心とした「おやご関係」への転換がみられ、個々に設立されていた教会や集談所は天理教加奈陀教会の下で統括されることとなった。また天理教を代表する団体として、日系移民社会においてその存在と活動は明確化することとなった。初代会長の鈴木も2代の田代も本部から派遣された教師として、日本領事館、邦字新聞社、日系人会などと交流した。また教会本部役員やアメリカ伝道庁長なども巡教として訪れるようになり、その折には日系移民社会の主要団体への訪問や各地での講演会などを行った。加奈陀教会の建物自体は大きなものではなかったが、人々が集う場所としての役割を担うこととなった。1936年の教祖50年祭にアメリカ伝道庁が北米信者の団参を計画した際には、鈴木氏の指導の下、カナダから19名が日本の教会本部へ帰参している。

加奈陀教会設置後の活動における特徴の一つは、当時の日系移民社会で大きな課題となっていた日系人子弟への教育があげられる。カナダ国勢調査によれば、日系人総数における二世の人数(割合)は1901年4,738人中64人(1.4%)、1911年9,067人中642人(7.1%)、1921年15,862人中4,218人(16.6%)、1931年23,342人中11,081人(47.9%)、1941年23,149人中13,685(59.1%)であり(佐々木、314頁)、1930年代には日系人総数の過半数となっている。当時の状況を初代会長の鈴木は「所謂『二世』は容貌の外は、個性も思想も、習慣も、何もかも外人そっくりであるが、外人はこの二世を雇用してくれないのである。コロンビア大学を首席で卒業した二世でさえも、今木挽をやっているという現状である。」(『みちのとも』1938年3月号、46頁)と述べ、また2代会長の田代は「心細く思われるのは二世の若い男女である。家庭人らしい淑やかさも、慎ましい気高さも、男らしい純朴さも、生々した子供らしさもない。」(『みちのとも』1939年11月号、97頁)と述べている。田代は信者や近所の子供たちを集めて日本語や日本文化の教育を行い、その様子を次のように語っている。

この国は土曜と日曜とがつづいて休みになっているので、サタデースクール(土曜学校)を初めて信徒や近所や知人の子供を集めて、聖上陛下の御真影の前で、日章旗を壁にかけて童話と修身、歴史の話をはじめかけた。素よりこの土地では宗教団体としては一番微弱な教会であるから大勢来て貰っても困るが、小さくとも固く根強く続けて行って、海外に於ける国民教育に資して見たいと思っている。(『みちのとも』1939年11月号、98頁)

また子弟教育は日本で行うという考えの親も多く、子供たちの中には一時帰国し、出身地の学校に通ったものもいた。BC州の布教師や信者の子弟の中にも日本に帰り、旧制中学校や旧制高等女学校、また天理外国語学校で学んだものがいた。

こうして加奈陀教会設置によって布教体制が徐々に整い、日系社会での活動の伸展が望まれたが、1941年に日米が開戦すると、カナダでの天理教伝道も中断を余儀なくされることとなった。

[参考文献]

- ・佐々木敏二「カナダの日本人移民社会とキリスト教会」同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』PMC出版、1991年。
- ・天理教加奈陀教会『三代会長を偲んで』天理教加奈陀教会、1992年。